

古川不可知氏の書評へのリプライ

左地亮子

はじめに、拙著『現代フランスを生きるジプシー——旅に住まうマヌーシュと共同性の人類学』を丹念に読みといてくださった古川不可知氏に厚く御礼申し上げます。また、古川氏にはたいへん貴重なコメントもいただいた。いずれも、否定的な意味での批判というよりは、筆者の研究の展開可能性を深く切り拓くためのヒントを与えてくれるものである。フランス南西部に暮らす「ジプシー」に関する研究書を、ネパール・エベレスト地域の山道と「シェルパ」を調査する研究者が分析することは不思議なめぐりあいにみえるかもしれない。しかし、人の身体と環境の関係が「移動」や「動き」というプロセスのなかでどのように紡がれていくのかに関心をもつという点で、筆者と古川氏の研究は必然的に結びつくものだと思う。このように地域横断的に相互に触発しあうことができるという点が、まさに人類学の魅力である。以下では、この予期せぬ出会いに感謝しつつ、古川氏からいただいたご指摘に応答し、今後の展望を記しておきたい。

フランスのジプシー、とくにマヌーシュと自称する人びとは、第二次世界大戦後から定住化を進めてきた。現在では、公営の集合宿営地にキャラヴァン（キャンピング・トレーラー）を留めたまま、ほとんど移動生活に出かけない家族も増えている。しかし、本書の舞台であるポー地域では、移動生活を再活性させているマヌーシュ家族がいる。かれらは、「家族用地」と呼ばれる私有地や家屋、あるいはアパートマンに住み、一見すると「定住民」のようにみえる。しかし、実は、かれらはキャラヴァンという移動式の住居も保持し続けており、これらの定着地や固定式の住まいを「いつでも出発して戻ってくる」拠点とすることで、むしろ移動生活を活発に展開している。定住民社会の所有制度にのって私的に利用できる土地や住まいを確保することで、逆説的に、マヌーシュは定住民社会の空間管理に縛られない移動の自由をもつことができる（本書 116-117 頁）。かれらは定住民中心的な制度に単純に抵抗する（そこから逃走する）のではなく、その内部に留まりつつ、実現可能なノマディズムを模索しているのだ。

以上の箇所に関して、古川氏は、そのようにノマディズムを再編している家族は、首尾よく「家族用地」を獲得することに成功した一部の家族に過ぎないのではないのか、それがマヌーシュ全体にとってどの程度まで一般的な実践なのかと疑問を挙げている。確かに、本書のデータを収集したときには、このような家族の事例はそれほど多いものではなかった。しかし、目下ポー地域では、マヌーシュにキャラヴァン並置型の住宅（「適合住

381

宅」と呼ばれる)を提供する政策が進められている。その構造は「家族用地」とよく似ていて、2018 年末にはおよそ 200 人が集合宿营地からそこに引っ越すことが決まっている。筆者は、「家族用地」を扱った第 3 章の最後でこの進行中の住宅政策に触れているが、マヌーシュたちの移動生活をめぐる先の見通しは明るく、ノマディズム再編に関する本章の議論はこの近い未来に繋がっているのである。

ただし、実際にマヌーシュたちの新住宅がどのようなものになるのか、またかれらの居住をめぐる政策がどのように変化するのか、予想できないことのほうが多いのも事実で、楽観的すぎるのも危険だ。かれらの生活環境は自分が決めたわけではない様々な都合（政治家や地域住民の思惑や意向）やルール（都市計画や住宅をめぐる法政策）に依存しているため、自らの関与の余地なしにいつでも別様に变化しうる。

古川氏は、本書の重要な点として、何が自然的であり何が社会的であるかを分析的に外から、事前に区分するのではなく、かれらが位置付けられた環境をそのままかれらの語りと実践を通して捉えていることを挙げ、本書が身体と環境をめぐる人類学の議論を「現代社会」へと拡張することに成功していると指摘してくださった。その通り、まさにマヌーシュにとって、非ジプシーからなる現代定住民社会は、自分のものとして飼いならすことのできない、不確実性に満ちた「自然」である。西欧近代の外部に生きてきたアジアやアフリカの伝統的遊動民とは異なり、「ジプシー」は近代化する西欧社会のなかで「発見」され形成された集団である。かれらは、自らのものと呼べる領土や集権的な政治組織を欠き、常に西欧近代社会という他者の世界の不確実性に直面しながら、その只中で、そこに生じる隙間に残された経済的・文化的資源を採集し、活用することで生き抜いてきたノマドである。このように「ジプシー」の存在を通して照らしだされる西欧における自然／社会のねじれを意識しつつ、筆者のこれからの調査研究では、今後新住宅への移住後に生じてくるであろうマヌーシュの共同体と移動生活の変化を追い、西欧社会という「自然」内部に生きるノマド、マヌーシュの身構えについて考察を深めていきたい。

一方、古川氏は「身体」や「共同性」をはじめとするキー概念の不明確さも指摘してくださっている。この点は、筆者自身も今後、自らの事例にそって新たな概念・言葉をつくりだし、西欧的な概念に取りこまれない思考を編みだす必要性を感じているところである。ただし、以下の点はここで確認しておきたい。名前や地縁に関する事例でも述べていたように、本書の主張は、直接的な身体性を越える領域や概念があらわれるとき、そこには、常に、すでに、身体の物理的・知覚的な環境との関わりが介在しているということである。そして、その絶えまない反復と反復のなかのずれや新たな創造を可能にするのが、まさに「住まう」という日常の身体的実践なのだということである。マヌーシュは、ある個人の名前（ロマノ・ラップ）、あるいは地縁や「私たち」という繋がりを感じ、あらかじめ生活世界のなかに固定したものとして埋め込んでいくための制度（命名）やイデオロギー（民族境界）をもたない。それらは、かれらのもとに一挙にたちあらわれるのではなく、あくまでも一人ひとりの身体とそこから多層的に広がる人と人、人と環境との関係のなかで徐々に生成し、浸透していくものである。

最後に、キャラヴァンが移動する様子とそこにあらわれる共同性に関する問いに関して

も応答しておきたい。筆者は、マヌーシュの居住の現場におけるキャラヴァンについて本書を通じて多くのことを思考してきたが、キャラヴァンでの実際の移動の様子については、本格的な調査をしてこなかった。そこで、目下筆者が取り組んでいる課題（「フランスにおけるジプシーの「旅の共同体」に関する文化人類学的研究」科研費若手研究 B・17K13585）でこの点に関わる調査を開始している。以下、概要を述べておきたい。

筆者がマヌーシュたちの「旅」の様子に興味を抱いたきっかけの一つには、次の出来事がある。南仏カマルグ地方の町サント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メールで毎年5月に開催されるカトリックの「ジプシー巡礼祭」に参加するため、先にキャラヴァンで出発したマヌーシュたちの後を追って、筆者がポーから約500キロの距離にあるその町までレンタカーを走らせたときのことだ。高速道路を使用したのも、朝にポーを発ち午後3時頃には到着したのだろうか。無事に到着したことをマヌーシュに電話で知らせると、「なんて早いのに！」と驚いた、そしていささか呆れた様子であった。のちに聞いたところによると、かれらはたいてい少なくとも2日をかけて、この距離を移動するのだという。高速道路ではなく一般道を通り、道（ルート）の途中で海辺があればそこで水浴をし、近くに親類が住んでいれば会いにゆき、地元の美味しい食べ物があればゆっくりと食事をするそうだ。

目的地へと続く道の途中で、何度も足をとめ、ときに道はずれ、日常とは異なる土地や人やモノとの出会いを享受し、そしてふたたび出発し旅を続けること。ヴァカンスを楽しむツーリストのように、一時的な旅の生活を享受するマヌーシュたち。そこにはもしかすると、ノマド（マヌーシュ）がツーリスト（定住民）という様々な他者とパースペクティブを共有する瞬間があるかもしれない。旅という動きやその「出会いの偶発性」[Massey 2005]を通して、町の周縁に追いやられた居住地に暮らす日常のなかではみられない多様で異質な他者との関係、すなわち同一性を志向しない偶発的な共同性が生じるかもしれない。今後の筆者の研究では、このようにノマドとツーリストがめぐりあうとき、東の間にたちあられる繋がりの可能性を、マヌーシュたちのキリスト教二教派の移動を伴う宗教活動（カトリックの聖地巡礼／プロテスタント系ペンテコステ派の移動集会）を目的とした旅の事例から探る計画だ。西欧社会内部でノマドとして生きてきた人びとが、アイデンティティの政治にもとづく「マイノリティ共同体」ではなく「市民たちの共同体」の内部に自らの居場所を探る状況を人類学的に記述すること、それが筆者の目指すところである。「別様でもあること」へと向けて旅に出るのは、なにもマヌーシュのようなノマド、そしてツーリスト・移民・難民ばかりではない。はるか古来より、ホモ・モビリタスとして、移動のなかに／移動を通して生を紡いできた私たちについて多角的に思考する人類学に挑戦したいと考えている。

<参考文献>

Massey, Doreen 2005 *For Space*. London: Sage.